



**Data** 2023-52

監督・脚本: 阪本順治  
出演: 黒木華/寛一郎/池松壮亮/  
眞木蔵人/佐藤浩市/石橋  
蓮司

## 👁️👁️ みどころ

阪本順治監督30作目は青春時代劇。オリジナル脚本による冒頭の舞台は、お寺の裏手の厠（カワヤ）だ。アップで映る、糞尿を掬う汚穢屋（オワイヤ）の矢亮の役割は？また、そこで運命の出会いを果たす3人の男女の役割は？

時代は“安政の大獄”が起きた安政5年（1858年）だが、「おれたちがいなきゃ江戸なんて糞まみれじゃねえか」と嘯く矢亮には、そんな世界は全く無縁。他方、今は長屋暮らしをしている武家の娘・おきくの父親が問う「なあ、“せかい”ってことば、知ってるか」の意味は？

TVドラマの延長のような純愛モノが溢れている昨今、阪本監督のこんな挑戦に拍手！「サステナビリティ！」と声高に叫ばなくとも、また、急激な人口の減少を嘆かなくとも、江戸時代のわが国はサステナビリティな国だったことがよくわかる。そんなこんなの問題点を、こんなピュアな青春時代劇からしっかり学びたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■阪本順治監督30作目はオリジナル脚本による時代劇！■□■

元プロボクサー・赤井英和の自伝を映画化した『どついたるねん』（89年）の監督デビューから30年余り。若い頃から時代劇に憧れ、2010年に『座頭市 THE LAST』を監督した後、「次はオリジナル脚本で時代劇を撮りたい」と考えてきた阪本順治監督が、今般30作目にして、何ともユニークなオリジナル脚本による時代劇に挑戦！

映画が始まる時代は、江戸時代末期の安政5年。そう言われてもピンとこないが、安政5年＝1858年は、その翌年にかけて“安政の大獄”が漸行された年。時の大老・井伊直弼による尊王攘夷派に対する徹底した弾圧によって、橋本左内、吉田松陰らが処刑され、日本の歴史は一変することになった。そんな時代の激動を描く“幕末モノ”の時代劇の名

作は多いし、NHK大河ドラマでも何度も取り上げられている。

しかし、「社会の底辺にある人の目線で映画を撮ってきた」と自負する阪本順治監督は、そんな“幕末モノ”には興味を示さず、一風変わった視線で庶民の姿に目を向けることに。そのテーマは下肥＝江戸のうんこ！阪本順治監督は、それを3人の青春モノで！

## ■□■あなたは肥溜を知ってる？こんな職業を知ってる？■□■

私は1949年生まれだから戦後の貧しさを知っているし、肥溜（コエダメ）も知っている。しかし、水洗トイレしか知らない若い世代は肥溜も汲取り式トイレ（ポッチャン便所）も知らないし、その匂い（臭さ）も知らないはずだ。

本作冒頭、「序章 江戸のうんこは、いずこへ 安政5年・江戸・晩夏」の字幕が流れた後、とあるお寺の裏手にある厠（カワヤ）の姿とそこで糞尿を掬っている男の姿が映し出される。この男は下肥買いの若者、矢亮（池松壮亮）だ。彼は江戸で糞尿を買い取り、郊外で肥料として売る、俗に汚穢屋（オワイヤ）と呼ばれる仕事をしているのだが、そんな職業をあなたは知ってる？それがわかるのは50代以上？60代以上？少なくとも20代、30代の人には彼が何をしているのかわからないはず。もちろん、その匂い（臭さ）もわからないはずだ。

## ■□■3人の主人公の出会いとは？それはとあるお寺の裏手の厠■□■

私の中学・高校時代の青春は、吉永小百合、浜田光夫のゴールデンコンビによる日活青春モノと共にあった。『愛と死をみつめて』（64年）のような難病モノ、悲恋モノでも、1960年代の日活の青春モノは輝いていた。今や大俳優となり、赤ちゃん言葉で孫をあやす姿がバラエティ番組を沸かせている高橋英樹は、当時先頭を走っていた芸達者な俳優、浜田光夫が目に見えなくなったという不幸な事件に遭遇した後、ぐんぐんその実力を伸ばしてきた俳優だ。

それから約60年。阪本順治監督が30作目の“青春時代劇”に登場させる3人の主人公たちの出会いは、とあるお寺の裏手にある厠だ。降り出した雨を避け、厠の庇の下に駆け込んだ中次（寛一郎）は紙屑の売り買いで生計を立てていたが、そこで雨宿りをしている中、雨を避けるためにひと休みしていた矢亮とさまざまな会話を交わすことに。続いて、そこにやってきたのが、この寺で読み書きの師匠をしているおきく（黒木華）だが、急いでここにやってきたのは、さて何のため？

いわば現代の公衆便所のような場所での、この3人の主人公の奇妙な“接近遭遇”を経て、中次は矢亮の新たな相方として下肥買いに足を踏み入れることに。他方、おきくは父親の源兵衛（佐藤浩市）と共に江戸木挽町の次郎衛門長屋に住んでいたものの、れっきとした侍の娘。したがって、あの厠での矢亮と中次との“接近遭遇”があったとしても、それ以上の接点はありませんが……。

## ■□■息子もいい男だが、親父も渋い良い味を！■□■

本作で矢亮役を演じた池松壮亮は、若い時から芸達者で有名。それに対して中次役の寛

一郎は長身のいい男だが、私はパンフレットを読むまで彼が佐藤浩市の息子だとは知らなかった。彼は『菊とギロチン』（18年）（『シネマ42』158頁）でキネマ旬報ベスト・テン新人男優賞などを受賞した有望な若手だが、本作では阪本監督演出の下、芸達者な池松壮亮と黒木華と共演したことが今後の大きな糧になるだろう。

1996年生まれの彼は肥溜も肥桶もそして天秤棒も知らないはずだから、池松壮亮と共に2つの肥桶を天秤棒で両肩に担いだり、その姿のまま疾走する演技は大変だったはず。しかし、それを立派にこなしたからこそ、身分が低く学問のない中次でも、武家の娘おきくのハートを射止めることができたわけだ。中次とおきくが知り合いになったのは、降り続いた長雨によって次郎衛門長屋の廁からあふれ出した糞尿を、矢亮と中次が懸命に片付けたためだが、そんな中次とおきくの2人が、なぜ本作の青春ラブストーリーの主演に？

そんな息子の成長を見守りながら、本作で2度目の親子共演を果たした佐藤浩市は、出番こそ少ないものの、おきくの父親、源兵衛役で渋い良い味を見せるのでそれに注目！彼がなぜおきくと2人でこんな長屋暮らしをしているのかは明示されないが、そこに曰く因縁があることはたしか。おきくがしっかり者に育ち、父親にもビシバシものを言うのは死んだ母親の影響らしいが、それでも阪本監督の演出によって、この父娘間の愛情の深さはしっかり読み取ることができる。源兵衛がいっばしの知識人・教養人であることは、長屋にやってきた中次に対して、廁にいた源兵衛が「“せかい”ってことば、知ってるか」と問いかけるシーンで明らか。また、源兵衛が相当な剣の使い手であることも、糞を垂れた後、腰に刀を差して出かけていくキリリとした姿を見れば明らかだが、彼は迎えに来ていた数人の侍達と一体どこへ行ったの？その報を聞いたおきくが懐剣を手に後を追う姿を見れば、これは大事件！そう思っていると、その直後には、源兵衛の死亡と一命を取り留めたものの声を失ったおきくという悲しい現実になるから、アレレ。なぜ、こんな事態に？

## ■□■恋模様は黒木華と寛一郎が！池松壮亮は進行役を！■□■

日活の青春モノでは吉永小百合と浜田光夫がラブストーリーの主演を演じ、高橋英樹がその進行役を務めるケースも多かったが、本作では黒木華と寛一郎が淡い恋模様の主演となり、池松壮亮はその進行役を務めているので、それに注目！

ラブストーリーは、時代によって、男女の身分によって、その他さまざまなファクターによって如何様にも作れるが、本作では、廁で偶然に出会ったおきくと中次が、降り続いた長雨で長屋の廁が溢れ出したことによって再会するところからスタートしていく。そのため、文字通りこの2人は「臭い仲」！ここは矢亮の言う通り“笑えるところ”だが、その直後におきくとその父親、源兵衛を襲う“不幸”を考えると、笑うことができない。しかし、さすが阪本監督の脚本を芸達者な女優、黒木華が演じただけあって、江戸時代末期の身分違いの若い男女の恋模様の展開を面白く見せてくれる。とりわけ、習字のお稽古の最中に書物の中に「忠義」という文字を見つけ、ひらがなでそれを書こうとした時に思わず「ちゅうじ」と書いてしまったため、おきくがそんな自分に呆然とし、やがてにやけて

しまい、さらには寝転がって畳をバタバタと叩き、上気した顔を着物の袖で仰いだり、隠したり、誰もいないのに恥ずかしがっているシークエンスは面白い。「安政の大獄」下、世の中は大きく激動していたが、おきくの胸の中の恋心の世界は一体どうなっていたの？

他方、本作の主演をおきくと中次に譲り、自分はストーリーの進行役になっているのが矢亮。本作の矢亮は、一方で、「おれたちがいなきや江戸なんて糞まみれじゃねえか」と汚穢屋の仕事に誇りを持ちながら、他方で、いかに蔑まれ虐げられてもペコペコと頭を地べたに擦り付けているから、彼のキャラは複雑だ。また、彼も学問はないはずだが、中次に対しては常に面白い言葉を吐くし、「ここは笑うところだろ！」と会話の流れや急所も心得ているから、この男はなかなかの知識人！？中次が矢亮に誘われるままに紙屑の売り買いから汚穢屋に転職したのも、きっとそんな矢亮の魅力を感じ取ったためだろう。本作に見る矢亮は、3人の青春時代劇の中では一步下がって中次とおきくとのおもむきをしっかりと応援する役割に徹しているから、そんな面白さもじっくりと。

## ■□■大寫しの糞尿は何を物語る？“せかい”とはナニ？■□■

本作冒頭のスクリーン上に大寫しになるのは、厠の中のうんこ。私の子供時代は、汲取り式便所の中に溜っている糞尿をバキュームカーで吸い取っていたが、「安政の大獄」の真ただ中の江戸では、矢亮のような汚穢屋が桶で糞尿を掬っていたらしい。それに続いて、厠から糞尿があふれ出している長屋の風景等が登場するから、本作では何度も正直言ってあまり見たくない風景を目にすることになる。

しかし、糞尿を肥料として使っている姿や、矢亮が「糞がおれらの、食い扶持だよ。あいつらの糞で飯喰ってんだよ」と語っている姿は意味シン！また、学のある源兵衛が本作前半、厠の中から学のない中次に対して語る「なあ、“せかい”ってことば、知ってるか」は本作のタイトルにされているほど重みと深みのある言葉だ。さらに、クソとミソの例えは今でもよく使われているが、矢亮が語る「糞も味噌とおんなじで、しばらく置いといた方がいいんだよ。これが本当の糞味噌だ。……笑うとこだぜ、中次」のセリフにも注目！本作では、再三スクリーン上に大寫しにされる糞尿が何を物語るのかを考え、その中から源兵衛のいう“せかい”とは何かをしっかりと考えたい。

他方、身分違いのおもむきの展開に戸惑う中次が、「おきくさんは、お侍さんのむすめで、おらあ、こんな身分だから、だから……」と語ったのは当然だが、他方で、おきくは「あー、あたしだって、武家育ちの外聞も捨てて、いまや糞とか屁とか平気で云えるようになったのでございます」と語っているから、今の2人は決して身分違いを気にする必要がないことは明らかだ。

## ■□■サステナビリティ（持続可能）と“青春”をタップリと■□■

私は弁護士登録をした1974年4月以降、一般民事、刑事事件の他、公害事件をライフワークとして取り組んできたが、50年後の今、それはサステナビリティ（持続可能）社会を実現する必要性という文脈で受け継がれている。開国？それとも攘夷？新選組？そ

れとも薩長？そんな対立構造が激しくなった江戸時代末期、安政の大獄の時代は、矢亮が強く主張しているように、サステナビリティ（持続可能）な社会だったわけだ。本作では、そんなサステナビリティに関して様々な名言が登場してくるので、それに注目！その代表は矢亮君が語る①「糞がおれらの、食い扶持だよ。あいつらの糞で飯喰ってんだよ」、②「糞も味噌とおんなじで、しばらく置いといた方がいいんだよ。これがほんとの糞味噌だ。……………笑うとこだぜ、中次」のセリフだ。

他方、章立て構成とされている本作の第七章が「せかいのおきく 万延元年・冬」だが、そこではおきくが作ったおむすびを通して、おきくと中次の恋が成就していく姿が描かれる。それに続く終章「おきくのせかい 文久元年・晩春」では、「青春だなあ」と中次が呟く中、若い3人が新しい世界に向かって走っていく姿が描かれる。戦後の日本はそれまでの軍国主義から民主主義へと急転換したが、そこでは石坂洋次郎が描く明るい青春小説が大人気になった。その代表が何度も映画化された『青い山脈』だが、私が見た吉永小百合主演版（63年）は、まさに「青春だなあ」と実感させるものだった。それと同じように、ところどころでカラー映像になるものの、ほとんどはモノクロの陰影に富んだ映像で描かれる阪本順治監督30作目の青春時代劇は見どころ十分の青春モノになっているので、その面白さをタプブリ楽しみたい。

2023（令和5）年5月8日記